

論文

満州における青・少年向けビジュアルメディアと移民政策

徐丹儀[†] 野村正弘^{††}

【要旨】 日本帝国主義は当初から満州移民事業を重視し、開拓移民として有望なのは、青・少年（若者）と考えていた。開拓農業移民政策にかかわり、満蒙開拓と青少年義勇軍の募集や送り込みなどの政策に関する事実が明らかにされている。満州の広報や宣伝に関する研究は放送、ラジオ、新聞を対象としてきたが、雑誌、絵本、漫画またポスターなどの多様なビジュアルメディアも、当時の庶民生活の隅々に深く関わっていた。また、色は人の感情や認識にも深く関わり、事物の識別やコミュニケーションにも大きく役立っているため、色彩ビジュアルメディアの重要性を否定する事はできない。

筆者らは正確な結果を導くために、配色スケールの適用という研究方法を導入した。その結果を用い、満州における青・少年向けビジュアルメディアと移民政策との関係を検討する。テキスト分析では、それらに記載された記事の内容について質的および量的な分析を行った。

ビジュアルメディアは検閲の影響を受けながら、移民国策を宣伝するための手段として次第に強硬になっていったことがわかった。また、王道楽土と共存共栄を明瞭に宣伝したことも判明した。その結果、青少年が満州を支援する気運も高まっていたと推測できる。

【キーワード】 満州 移民政策 ビジュアルメディア 計量テキスト分析 色彩分析 絵本 ポスター 漫画

1. はじめに

満洲と日本人編集委員会（1976）には、以下のような記述がある。

『1926（大正15）年、予備の陸軍中佐角田一郎は「福島閣下が言っておられた満蒙移民を思い出した。今の日本は満蒙移民をやるほかに、難局打開の途はないと思う」と言った。』

1927（昭和2）年頃、日本経済は金融恐慌によって打撃を受け、特に農村の窮乏が激しかった。また、農村は人口過剰でもあった。このような危機から逸脱するために、満蒙開拓移民が政府の施策となっていく。満州に開拓移民を送る計画が始まったのは、日露戦争直後であった。後の満蒙開

拓青年義勇隊訓練所長 加藤完治は日本の現状から満州移民を決意した。しかし、移民初期に出国費、土地の購入、建物建設、匪賊の防備、移民の募集、訓練地から送出など問題点に対し、懐疑を抱いた反対者もたくさんいた。1932（昭和7）年に満州移民会議が開催され、その後、関東軍参謀長 石原莞爾は加藤に移民に必要な土地や建物を提供すると諾した。加藤は植民を教育の延長と考え、第一次武装移民を推進した。1932年12月8日、屯墾隊顧問 東宮鉄男は「第一次武装移民の精神動揺状況及び第二次以降の人選に関する要望書」という意見書を書いている。その中の青少年に対する要望は次のように述べている。

『九、純真の年少者は可なり、将来青少年中よりも採用する可とせん。』

[†] 三井住友海上火災保険（中国）有限公司

^{††} 駿河台大学メディア情報学部

加藤は植民教育を強調した。1937(昭和12)年に広田内閣は前4回の移民試験の成果を参考し「満州移民」を国策として決定した。そして、「二十年間百万戸五百万人」を満州に移出しようとする。満州移民国策に関係したのは関東軍、満洲国政府、拓務省、満洲拓殖株式会社、南満洲鉄道株式会社、満洲移住協会など機関であった。この国策は「理想的な移民村」と称えられ、満州開拓への夢をかきたてる原動力となった。加藤の構想による青少年移民は、国策移民の第一着手と考えられている。以上が満州移民開始の経緯である。上記の展開に照らして見れば、本研究のビジュアルメディア研究対象は、移民政策計画の実行を徹して刊行されたものとなる。

これまでの研究には以下のようなものがある。白取(1991)は満州移民事業が完成を待たずに崩壊していたというべきであろうと指摘している。また、内木(2010)は「虚偽」に満ちた宣伝、渡満の背景、過酷な生活の実態を明らかにしている。満州児童文学の研究では、木村(2009)、柴田(2014)は、あまんきみこ、山田健二、石森延男などの作家の作品が表現した豊かな満州などのイメージが大衆を悲劇に巻き込んだと述べている。また、中国側の研究によれば、陈(2017)は刊行された文学作品である童話を、「五族協和」、「王道楽土」の植民意識を強く宣伝するために、当時の満洲国政府は利用したと主張している。

それ以外では、長与(1938)は、満州への経路と満州に関する知識を詳しく紹介している。是澤(2017)は「日満親善交流」のための日本学童使節を、対外融合から国内の団結に向かうための目標を実現する、小学生を中心とするメディア・イベントであると同時に、国家への帰属意識を高めるイベントと評価している。

筆者は、満州建国の前後数十年間に、開拓移民と現地住民との融合をはかるため、当時の政府は青・少年(若者)の移民募集に着目する重要性を理解していたものと考え。青・少年に対する開拓農業移民政策の宣伝には、文字より絵による宣

伝が効果的なはずで、多く集めるための宣伝手段の一つとして、ビジュアルメディアが想定される。よって、絵本、漫画、ポスターは満州と日本に住む青・少年に積極的な宣伝の役割を担ったと考えられる。特に、絵本が力を入れた内容は満州と満州へ行くことの宣伝を融合することであった。さらに、開拓の夢が一代で実現されない場合のことを考え、次代を担う子供たちを育てることにあったと考える。

貴志(2010)は、満州に関係するビジュアルメディアを紹介している少ない研究成果の一つである。しかし、ビジュアルメディアという視点からはまだ詳細な分析が行われているとは言えない状況にある。今まで満州についての宣伝研究は新聞、放送、ラジオが多く注目を集めた。しかし、この時代はビジュアルメディアが一段と進歩し、これが特定の青・少年移民募集、さらには満州の社会構造、移民融合までにも大きな影響をもたらしたと考えられる。

本研究は、絵本およびポスター、戦時漫画を分析対象として、移民国策を実現するための宣伝が青・少年にどのように伝えられたのかを明らかにし、ビジュアルメディアと移民政策の関係を検討する。

本論文は徐が令和3年度駿河台大学大学院総合政策研究科メディア情報学専攻の修士論文として執筆したものを、再構成したものである。なお、「洲」が常用漢字ではないため、引用文献と固有名詞を除き、本稿では一般的な表記である漢字「州」を用いる。

2. 研究対象としたビジュアルメディアの概観

満州時代に発行された絵本や漫画、ポスターなどの関連研究は、注目されていない。前述のように、新聞、雑誌や文学作品を中心に研究が行われてきたからである。当時の主流マスメディア以外にも、プロパガンダなど国策宣伝や精神昂揚に利用されてきた様々なビジュアルメディアもあった

はずである。そこで、青・少年向けビジュアルメディアの出版物に関連する状況を探究するために、当時の代表的な作品を整理して以下の資料を発掘した。

2.1 絵本

2.1.1 『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』

「キンダーブック」は日本で最初の月刊保育絵本である。国立国会図書館が掲載している情報によれば、1927(昭和2)年11月にフレーベル館より創刊されている。今まで、フレーベル館は総合絵本、科学絵本、学習絵本、おはなし絵本などシリーズを刊行している。1941(昭和16)年に出版社名を「日本保育館」に改称した。1942(昭和17)年に、戦時統制により「ミクニノコドモ」に改題、1944年に終刊後、「日本ノコドモ」に吸収した。戦後、出版社名を「フレーベル館」に戻し、復刊した。『観察絵本キンダーブックマンシウ』は1933(昭和8)年5月20日に刊行された文部大臣推薦の一冊である。

2.1.2 『講談社の絵本満洲見物』

国際子ども図書館は、「講談社の絵本」に関する紹介を次のように掲載している。

『1936(昭和11)年12月に創刊し、大日本雄弁会講談社が幼年の前段階の読者層に向けた絵本である。当時の一流の日本画、洋画の挿絵画家に依頼し、「読む雑誌から見る雑誌」として豪華な絵本をめざして発行した。1942年4月に終刊となり、その後「コドモエバナシ」と改題し、1944年3月まで続いた。戦後まもなく、1945年(昭和20年)10月には「講談社の絵本イッポンノワラ」を発刊するが4号で終刊となり、1946年(昭和21年)2月に再び「コドモエバナシ」と改題し、1958(昭和33)年9月まで刊行された。』

『講談社の絵本満洲見物』は1940(昭和15)年に

刊行された特別読物の満州絵物語である。この一冊は満州に関する風物を、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』より詳しく紹介している。

2.2 漫画

2.2.1 『あなたも義勇軍になれます』

この漫画は白黒漫画である。拓務省拓北局が1940年代に刊行したが、正確な刊行時期ははっきりしない。田河水泡が文・絵の編集を担当している。この一冊には総計10枚のコンテンツがある。この中の7枚は内原訓練所の状況、日本から満州へ開拓に行く義勇軍の始めと現状を漫画で紹介している。漫画の主旨は青少年の精神鍛錬で、内原訓練所の生活を詳細に紹介している。

2.2.2 『拓友』

『拓友』は1940(昭和15)年に創刊された、満州開拓青少年義勇隊の機関誌である。本稿では1943(昭和18)年1月「拓友マンガ展」、3月号「伐採の巻」のタイトルで3枚の短い漫画ストーリーを含めて分析する。満州へ送り込んだ10代の青・少年たちの連帯を固くするために刊行された。拓務省、満洲拓殖株式会社、満洲移住協会など機関が満洲移民国策に関係して発行したものである。

2.3 ポスター

2.3.1 満洲(帝国)協和会制作ポスター

京都大学東南アジア地域研究所が公開している満洲国ポスターデータベースを参照し、児童像の描画されたポスターに絞って検討する。10枚のポスターが研究対象である。ポスターの主題は建国記念日、訪日イベント、日満友好、治安に関係したものが多し。発行機関は満洲帝国協和会を中心に、満洲国資政局、国务院総務庁情報処である。

2.3.2 「満洲(帝国)協和会」とは

李淑娟等(2014)によれば満洲協和会に関する歴史・発展は次の通りである。1932(昭和7)年3月15日に満洲国資政局が建立された。それと共に、

「満洲青年連盟」は民族協和の運動を行った。関東軍の指示のもとで、「満洲協和党」は満州国の最大の政治団体になった。1932(昭和7)年4月に、「満洲協和党」は「満洲協和会」に改名した。1932年7月25日、「満洲(帝国)協和会」は正式に成立した。複数民族国家における国家建設の実施と国家動員の支援と社会秩序の回復などの問題を解決するために、満洲国協和会は政治動員、社会福祉事業に重要な役割を担った。満洲と日本人編集委員会(1976)によれば、「満洲国協和会」は満洲国政治の中では御用党派で、移民国策の実施に重要な役割を果たしていた。また、その組織による機動的な青年行動隊活動で青訓卒業生を掌握し、冬の農閑期間に初期的な宣伝活動に従わせていたとしている。

3. 分析方法と分析結果

上記の絵本、漫画、ポスターについて計量テキスト分析と色彩分析を行った。単に各ジャンルの文字や色を整理、分析し、理解するのではなく、潜在的な概念、連関、論理を読み取ることを目的とした。

3.1 計量テキスト分析

計量テキスト分析では、妥当性・信頼性と可視化を兼ね、簡潔的、詳細な情報が得られる。この分析には「KH Coder」というソフトウェアを用いた。文字データを正確かつ効率的に統合するために、絵本、漫画、ポスターを同一の方法で作業を行った。手順は以下の通りである。

- (1) 文章の本文を全て現代語訳にした表を準備する。
- (2) 「KH Coder」起動し、プロジェクトにMicrosoft Excelで作成した現代語訳表を新規コンテンツとして登録する。
- (3) 前処理を実行する。
- (4) 強制抽出語を設定する。自由に設定するのではなく、「満州国」、「満州人」、「新京」、「鴨緑江」、「周水子」、「忠霊塔」など地名と固有名詞を考え

た上で整理する。何度も試行した後、最終的な強制抽出語を設定する。

(5) 文字データを再度処理する。

(6) メニューから「抽出語リスト」と「共起ネットワーク図」を自動的に作成する。

以上は、多変量解析法を利用している。抽出語リストにより、品詞統計一覧表と頻出語上位20の統計図が作成できる。共起ネットワーク図では、「出現パターンが似ている」、「共起している」ことが見出される。共起する語を実線と点線で連結するネットワークは、お互いに強く結ばれる部分ごとに異なる色とグループに分けられている。共起ネットワーク図を精度高く解読するために、まず、図には必ず丸の大小、太い点線、色の塗り分け、カッコ数字などを中心として、テキストの前後文脈、さらに全体的な構成を再確認した。次に、図による顕在要素の変化と潜在意識の変化を明らかにした。

3.1.1 テキスト分析

『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』14ページのテキスト分析結果の頻出語を図1、共起ネットワーク図を図2に示す。

『講談社の絵本満洲見物』23ページのテキスト分析結果の頻出語を図3、共起ネットワーク図を図4に示す。

『あなたも義勇軍になれます』総計14ページのテキスト分析結果の頻出語を図5、共起ネットワーク図を図6に示す。

『拓友』漫画3ページのテキスト分析結果の頻出語を図7、共起ネットワーク図を図8に示す。ポスター10ページのテキスト分析した結果の頻出語を図9、共起ネットワーク図を図10に示す。

3.1.2 言語の特徴

絵本・漫画・ポスターに使用されている言語には、一定の単位の中で組み立てられた複数の要素が認められる。テキスト分析の頻出語集計と共起



図1 『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』頻出語

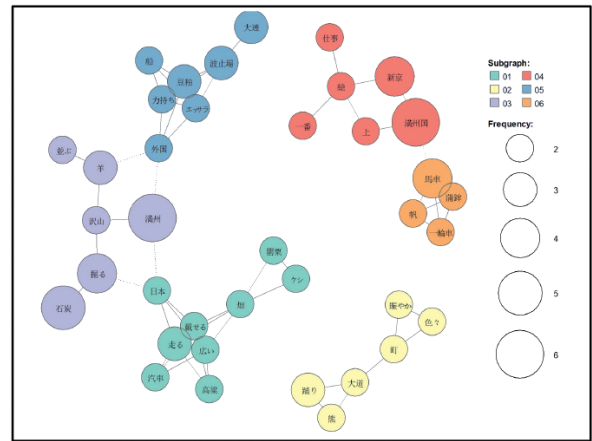


図2 『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』共起ネットワーク図



図3 『講談社の絵本満洲見物』頻出語

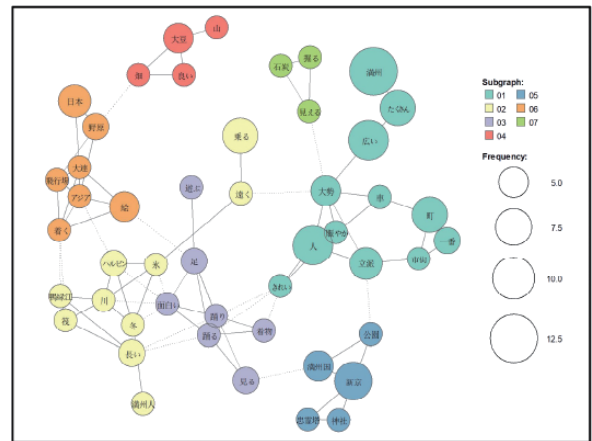


図4 『講談社の絵本満洲見物』共起ネットワーク図



図5 漫画『あなたも義勇軍になれます』頻出語

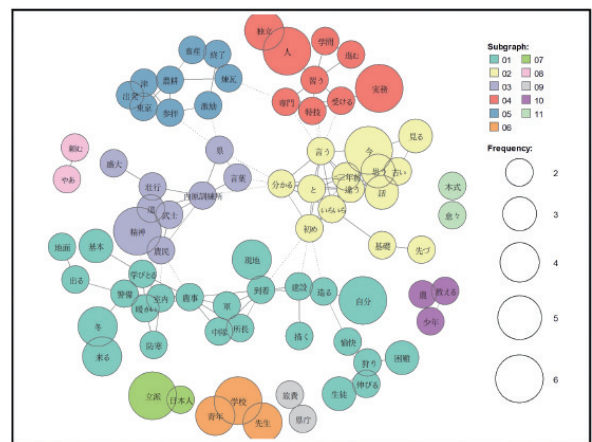


図6 漫画『あなたも義勇軍になれます』共起ネットワーク図



図7 漫画『拓友』頻出語

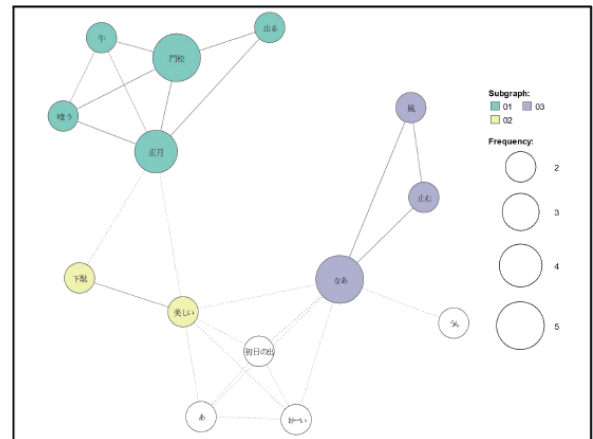


図8 漫画『拓友』共起ネットワーク図



図9 ポスター頻出語

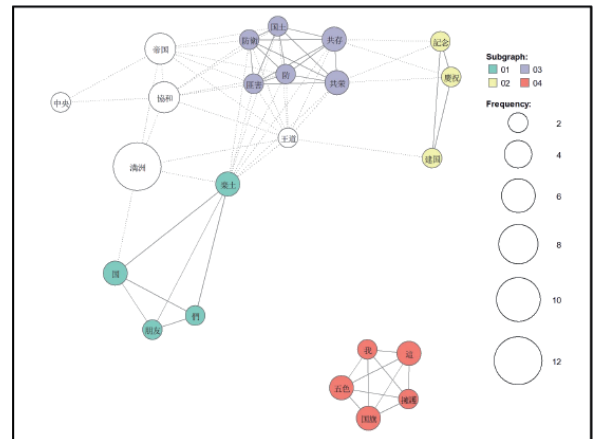


図10 ポスター共起ネットワーク図

ネットワーク図の分析を見ると、ジャンル別によって、強調する言葉と共起の程度と文脈の関連性が異なる。「満洲」という言葉は絵本、漫画、ポスターにかかわらず、繰り返し出てきた名詞である。これは各部分の主題、あるいはテーマに起因している。次に、『講談社の絵本満洲見物』は『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』と比べると、文脈の関連性およびストーリー性が強くなっている。満洲における風物が詳しく紹介されているためであろう。図1を見ると、6回「満洲」と「満洲国」、5回「石炭」、4回「新京」、3回「大連」という言葉が頻出している。満洲に関する地名についての描写が多かったからである。これに続いて多く出現しているのは「掘る」、「走る」な

ど一般的な動詞で、交通手段を紹介する場面で使われている。また、「馬車」、「波止場」、「豆粕」、「羊」など満洲の風景に関する名詞が挙がっている。図2を見ると、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』において関連性が一番強い部分は「日本」、「載せる」、「走る」、「広い」、「高粱」、「畑」、「罌粟」など言葉である。

出現パターンによって、データの主題を利用したカテゴリー5つを作成し、カテゴリーに記事の具体的な内容を分類するという分析を行っている。そこでは、満州市街、石炭堀場、波止場などの主題に集中する。太い実線で結んでいる色の塗り分けを見ると、この本のストーリー性が低いといえる。図3から分析すると、13回「満洲」、8回

「新京」、6回「日本」、4回「ハルビン」が用いられ、地名を使う頻度が高いことがわかる。図1と異なっているのは、9回「広い」、7回「たくさん」、6回「立派」、5回「大勢」のような形容詞、副詞、形容動詞の使用が多くなっていることである。7つの分類を含めて図4を作成したところ、「満州」という語彙を始点に、それをめぐる議論を絡めて有名な都市、立派なイメージに言及している。

漫画では、「訓練」が26回と極めて多く出現する(図5)。また「満州」、「義勇軍」、「開拓」、「家」、「日本」、「学校」などの名詞が出てくる。「行く」、「出来る」と言う動詞も非常に多く出てくる。それは、自分、実務、精神を強調している文脈があるからで、この漫画の特徴だと考えられる。そして、「内地」と「現地」という言葉が対応して出現している。図6を見ると、12の分類がこれに対応するものとみなせる。「自分」、「現地」、「今」、「実務」、「精神」、「人」などの語が集まり、別の言葉はこれらを取り巻いている。図7を見ると、「なあ」、「うん」、「おーい」など日常的な会話で使用される言葉の頻度が高い。また、そこで多く描かれているのは「門松」、「正月」、「元旦」などの祝祭日のお祝いの様子である。『拓友』漫画から読み取れる言葉の網状連結は単純である。3つの分類から構成されている。

最後に、ポスターの発行処を一緒に含めて考えると、図9では「満州」、「協和」、「帝国」、「楽土」、「共存共栄」、「国旗」、「王道」という名詞を取り出せる。図10では点線で連結している白い丸で表示されている。

コンテンツで多く用いられていた言葉を図表化し、描画する共起関係の強さを参照すると、漫画『あなたも義勇軍になれます』の係数の複雑さは第一位で、絵本は第二位で、ポスターは第三位となる。

3.2 色彩分析

日本色彩研究所(2006)は、視野中に複数の色があるほうが目を引きつける度合いが高いとして

いる。そこで、印刷された絵本、ポスターの表面の色を測定して、色の現れ方の分類、配色特徴を考査し、絵のイメージは何の意味を代表するのかを考察していく。本研究では『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』、『講談社の絵本満洲見物』及びポスターを研究対象にする。漫画は単色の印刷なので、色彩分析に含めない。色彩分析の手順は次のように実行した。

- (1) ウォーム、クール、ソフト、ハート、そのWC / SHの二軸で分類する「配色イメージワーク」を用意する(図11)。
- (2) 印刷されたビジュアルメディアの色に対して配色テクニックを確認する。
- (3) 色相、彩度、明度が区別されるだけでなく、それらの単色また多色、各ジャンルによる嗜好色を比較し、華やか、爽やか、穏やかという配色の範囲を明らかにする。
- (4) 「配色イメージワーク」を参照し、それぞれ位置づける色彩パターンから分析した上で、配色トーンと基調色を考察する。
- (5) 体系的に色彩イメージを整理し、明確な表現と言葉を与える。
- (6) 各ジャンルの色彩イメージの種類と出現回数を二軸でグラフを作成する。
- (7) フォトリサーチも用いて、Web上に公開されている当時の現場状況を調査して比較する。

このように、イメージワークを参照すれば、絵本とポスターの色彩基調を確認できる。さらに、配色の全体像を代表するページのサンプルを考え、その配色イメージを言語化すれば、色彩の活用に関する対人的意味を考えることができる。

3.2.1 色彩イメージの統計

各ビジュアルメディアについて行った色彩分析のグラフを以下のように示す。『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』色彩イメージ統計を図12、『講談社の絵本満洲見物』色彩イメージ統計を図13、ポスター色彩イメージ統計を図14である。



図11 5色配色イメージ・スケール

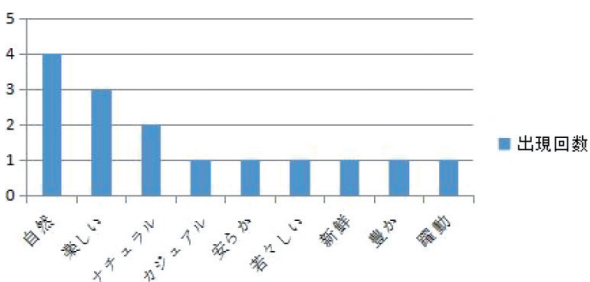


図12 『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』
色彩イメージ統計

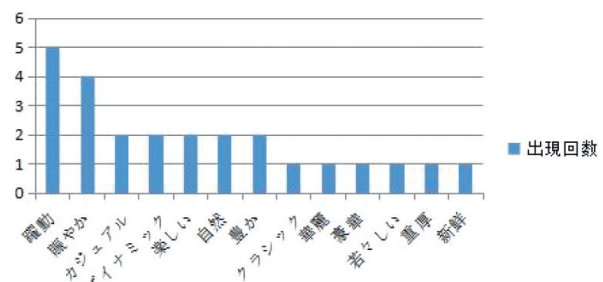


図13 『講談社の絵本満洲見物』色彩イメージ統計

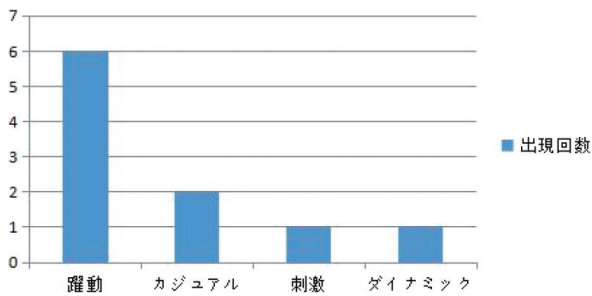


図14 ポスター色彩イメージ統計

3.2.2 色彩の特徴

色彩イメージのグラフを見ると、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』は、自然な配色イメージに傾けていることがわかる。賑やかさと平和、楽しみなどの雰囲気が強調されている。多い順に「自然」、「楽しい」、「カジュアル」、「安らか」の順で並ぶ。全体的に図11の5色配色イメージ・スケールの「ナチュラル」の範囲内に分布している。

一方、『講談社の絵本満洲見物』は楽しい、自然のような色彩イメージとなり、ポスターと同じように躍動的な配色イメージに指向している(図13および14)。この中では「躍動」、「カジュアル」、「賑やかな」、「ダイナミック」など色彩イメージが際立って見える。図14に示したポスターの配色は、躍動的な感覚を中心にするイメージである。「ダイナミック」のようなウォーム系に分類される。総じて、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』は実際に存在していた風景、港など場面に即した配色を使う比率が高いが、ポスターは暖色で刺激的な色を単一に使用しているものが多い。

4. 考察

4.1 テキスト分析の考察

3つのジャンルに使用したテキストを比較し、二冊の絵本をまとめて考察すれば、単純な語彙を通して、満州市街の発展や土地の豊かさ、賑やかな住民生活など満州イメージを児童に伝達し、国策の意味を潜在的に理解させようとしていると言える。よって、満州に誘う意味が付与されてい

ると判断される。

まず、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』のテキストの場合は、疑問形で「満州へはどう行くか」のような表現がある。その他は全て叙述法を選択している。おおむねわかりやすい言葉を組み合わせてテキストの意味が生み出されている。原文は全てカタカナで記述されており、幼い子どもでもわかりやすいコンテンツである。『講談社の絵本満洲見物』でも、テーマ以外の大部分がカタカナで書かれている。

これに対し、「満洲」、「撫順」、「新京」の地名、「忠霊塔」、「天照大神」などの固有名詞、「大豆」、「高粱」など大切な農作物は漢字で表記している。テーマの部分は、日本語表記と中国語表記や発音の表記が用いられる。テキストの内容は拓務省拓務局東亜第二課長山口乾治により執筆されている。

児童の日常娯楽と家族生活に関するページには、それぞれの娯楽、観光場所が登場している。たとえば、満州の夏は大連近郊の景勝地星ヶ浦海水浴場である。海岸が極端に少ないこの国にあって、得難い夏の広場である。また、西公園の瓢箪池のスケートは楽しい冬の遊びで、広大な銀世界がそのままリンクになる。新京西公園、ハルビン第一体育場でシーズンともなれば、老若男女のスケーターで賑わい、風情のあるスケート場として名高い。また、町の見世物も「熊踊り」、「皿回し」、「猿回し」などが全て面白ものとして描かれている。さらに、道教の主神「娘々」を祭る大陸最大の民族祭「娘々廟会」多くの参詣者で賑わうページもある。このように、娯楽、観光を強調することによって、満州へのあこがれを抱くように方向付けている。以上の史実は毎日新聞社(1978)によって記述されている。そして、一瞥して家族が一家団欒して座る生活場面は幸せ、安らかな雰囲気の色濃く表している。即ち、満州をこのように活気に満ちた素晴らしい国として描いている。

移民政策を直接的にアピールしているのは、満州へ行く乗り物や現地交通、資源や農畜産物の豊かさである。周水子飛行場や超特急豪華列車「ア

ジア號」を登場させ、交通の便利さをはっきりと伝達している。そして、新京の美しい町と立派な役所などの紹介は、『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』と『講談社の絵本満洲見物』の2冊で似通った表現が使用されている。

ハイブリッヒ(2002)によれば、リットン調査団は1932(昭和7)年4月に撫順石炭採掘場を訪れ、大部分は露天掘で、大きな機械も使用した世界最大規模の採掘場であったと報告している。これは『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』が刊行される前年であるが、満州が豊かな国であったことを世界に知らしめることにもなった。

しかし、1933(昭和8)年に刊行された『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』では石炭掘場についての表現は短く簡単であった。それに対し、1940(昭和15)年に刊行された『講談社の絵本満洲見物』では、たくさんの大きな機械で掘り採っている機械掘りの場面が強調されており、その対照は短期間で満州が発展したことを強調しているとも言える。

毎日新聞社(1978)には以下の記述がある。

『公主嶺は南満と北満との境界にある連京の主要駅だから、穀物の集散が多い。近くにある農事試験場、農業学校は満鉄の直接経営であった。さらに、満州の特産物である大豆、高粱は日本、アメリカ、ドイツ、南洋など全世界へ送り出されている。』

これも、満州が世界に通用する豊かな国であったことを強調したものである。

漫画のテキストは、満蒙開拓青少年義勇軍の募集推進を目標として開拓の意義と内原訓練所での実務訓練について紹介している。3つのジャンルの中でもストーリー性が一番強く、複雑な連結で組み合わせている。絵本と異なる点は「開拓」、「日本精神」というナショナリズムの表現が多いことである。青年将校の体観と維新観は、

『日本精神則ち皇道は、天御中主神を中心として中心分派し、遠心求心兼備せる

世界大道宇宙(自己及天体)の真理であつて恰も太陽が万物を生成育化するが如きものであり、大御心が世界を隅なく照らす。ものなることを確信しまして、而して此の精神が日本において最も発揚せられたる時代は、大化改新、建武の中興、明治維新にあることは疑なき事実であります。』

とされていたと、日本人編集委員会(1976)は日本精神の本質をこのように説明している。

ポスターのテキスト量が一番少ないが、言葉を細かく切り出して解釈すれば、王道楽土国策の意図を宣伝していることがわかる。街並みや風習のほとんどは、当時の満州の旅行本を参考にまとめられている。しかし、それらのいくつかは、公開時に当時の状況を正確に反映していない。例えば、日本植民地化によって、アヘンは買収法の設定で専売制となり、熱河、間島、三江各省が採培指定地域とされた。また、喫煙には政府の許可証が必要であったという厳しい状況であったが、それは書かれていない。即ち、子供や多くの一般人が読み手であるため、意図的に不適当な内容が削除されていることがわかる。

同様に戦時下においては、絵本の一般的な教育機能も変わり、都合の良い情報のみを伝える宣伝機能がはっきり見られる。絵本、漫画、ポスター各枠組みを比較すると、ナショナリズムの傾向と国策の把握は次第に強くなっていったと言える。

4.2 色彩分析の考察

絵本、ポスターなど印刷物の色を分析し、躍動、カジュアル、賑やかな、ダイナミックなど指向する色彩イメージが、シンボルとする満州国国旗の色に関係していることがわかった。その時代の美意識は、国旗色、あるいは満州のエリアカラーに繋がっていると考えられる。客観的な色と主観的な色はエリアカラーと組み合わせて活用されていると言える。当時、絵本の画家たちは満州へ行って取材してきたとは考えにくいので、参照

したデータソースの一部は満鉄写真集で、その写真を再創作し使用したものであろう。いくつかのページで構成が酷似している。

絵本の色彩使いはテキスト分析の解釈と一致し、「楽しい」、「平和の雰囲気」である。絵本では、画家は客観的写真から物理世界に属する色彩を用いる場合が多いと考えられる。例を挙げると、賑やかな大通りについての描画は実在の風景色であろう。西公園前の通り、関東庁、大同学院、ニッケ百貨店、満蒙毛織会社などのある目抜き通りは整然として立派な商社のビルが立ち並ぶ。

これに対し、自分自身の主観的判断と色彩感覚を含めて作った場面もある。例えば、飛行機や子供を中央の部分に異常に大きく立体的に描き、画面の前面に浮かび出させたイメージの色彩使いは写実的ではない。満州の当時の写真に参考にして作成した絵に、意図的に子供の像を加えて画面を構成したことがわかる。子供像を正面の角度で描き、子供たちが仲良く手を取り合っている場面がよく出てくる。これも不自然で、意図的に「友愛」を表現し、満州を美化していると考えられる。

ポスターの色彩傾向は、拡充生産重視の国策に即している。ポスターの宣伝語はそれに完全に一致する。その色には日本の国家主義的性格が強く刻印されている。日本はその動向に注意深い目を向けていたからである。また、その色彩は満州国旗の色彩に強く影響されている。満州国旗は満州の理想と使命を表徴するものである。左上角4分の1に赤青白黒4色を均分に横列し、中央部には黄色を配置している五色旗である。満洲国務院総務庁情報処が発行した『満洲国国旗考』には、黄色は中央の土、万物の化育、四方を統御する王者の仁徳を意味し、融和・博愛・大同・親善を表す。赤は火と南方を意味し、誠実真摯・熱情などの諸徳を表す。また、青は木と東方を意味し、青春・神聖などを表す。白は金と西方を意味し、平和・純真公儀などを表すとされている（貴志、2010）。この考え方を植え付ける狙いがあるもの



図15 満州国旗

と考えられる。

国旗、街の風景、建物、服装などそれらは全てエリアカラーに関係する。満州では複数の民族や方言が存在している多民族構成という特殊性を考えれば、無意識のうちに住民の生活や心を包み込んできたエリアカラーが多く使用されていることも理解できる。編集者は満州の土地を構成するベースの色彩を本質的に認識し、異民族の壁を破っているともいえる。また、読み手に積極的に観光、歴史、伝統風土等地域の特徴を伝えている。そして、国旗シンボルとエリアカラーを示すことで、エリアアイデンティティを醸成している。エリアカラーを活用すれば集団意識、仲間意識を育てることができると認識していたと考えられる。

総じて、上述のような絵は感情的な反応を呼び起こすため、その内容に注目する効果がある。国家シンボルである国旗を強調し、住民に国家の意味を理解させようとする意図が感じられる。色彩において、大山(2008)はオレンジ、黄色などが目立ちやすい色であり、それに対して青系統は目立たない色であることを指摘している。発達段階の子供にとって、刺激な色は認識と感情効果をもたらし、意味深い影響をもたらしたと考えられる。子供たちは絵本から自分の経験に基づく連想を展開する。文化の異なる地域に対しても、子供は故郷と同じような共感イメージを持つに至ると考えられる。

4.3 ビジュアルメディアが含んでいる顕在と潜在意識

4.3.1 満州へ誘う

分析した3つのビジュアルメディアは、満州へ行くメリットを多方面から紹介している。例えば、様々な交通手段、ライフスタイル、美しい景色、豊かな娯楽生活などである。それはテキスト単位を超えて、絵本全体へと一貫して組織立て、観念構成的な意味と対人的な意味を統合する。絵本のテキストは交通手段と豊かな資源などにつながり、特に『講談社の絵本満洲見物』には、「日本のお子さんがたへ」と言う前言が書かれている。そこには、

『みなさまもぜひ一ど、満洲國へ見物においでください。満洲國にも、げんきな子どもが大ぜいゐて、日本のみなさんと、おなじやうに、お國のために、いっしやうけんめいベンキヤウしたり、からだをきたえたりしてゐます。その子どもたちが大きくなるころには、満洲國は今よりも、いっそうつよく、りっぱになつてゐるでせう。』

と書かれている。満州は将来性がある楽土であるという満州国大使の話に掲載することによって、「満州へ誘う」という政治的意図を子供たちに直言している。

漫画では、日本出発と満州到着のルートマップが描かれているため、若者は満州に行くことを明確に理解できる。ポスターは地域住民の統合と治安の維持に焦点を当てている。このように、顕在的および潜在的両面から読み手に、満州へ誘いを擦り込んでいる。

4.3.2 日満親善の推進

各ビジュアルメディアとも共通的に日満友好、伝統的な家族のイメージを表示している。その理由は、「日本家族主義が一貫し、孝なる事即ち忠なる君民一体の国家であること」に関係するものと考えられる。「友情」、「家族」のような特徴的

な感情移入要素を絵本、漫画、ポスターなどビジュアルメディアに加え、読み手に個人との共鳴、普通の家族との共鳴、人間性との共鳴を喚起させている。絵本では、子供たちが友好的に助け合ったり、平和に遊んだりするシーンを描画し、青少年たちの成長に不可欠な友情と団結を繰り返し表現している。

また、家族は国の最も基本的な単位であり、国民生活の基盤であるとし、家族の相続と国家の相続の間には不可避の関係があるとしていたと考えられる。それゆえに、普通の家族生活を多く描写し、満州に行っても幸福は変わらず、家族移民や集団移民も積極的に推進することが望ましいという理論へと繋げている。満州の新秩序建設と青少年向け宣伝とが固く繋がっているため、友情と繁栄する家族のイメージがビジュアルメディアに用いられ、「日満親善」を子供に対して強烈にアピールしていると言える。

4.3.3 王道楽土と民族協和というアイロニー

建国宣言によれば、王道主義の実行と王道楽土の実現などは満州が創造した革新的政治理念である。貴志(2010)および山室(2004)によれば、「漢・満・蒙・日・朝」の五民族が一律平等に共存共栄を図っていくという五族協和ないし「民族協和」の理念である。満州終焉の過程で唱えられた「民族協和」理念は、絶えずイデオロギーを叫んでいた。『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』の裏紙に描かれているように、王道楽土の建設と民族協和を綱領として新国家を作るためである。

しかし、満州における日系、満系の差別は存在していた。筆者の徐が2021年8月に行った大連現代博物館での調査から、日本人が住む街は整然としていたが、豆粕を運ぶ満漢労働者の労働時間は長く、生活環境が非常に悪かったことがわかった。また、当時の日本帝国は王道楽土の実現のために、満州で新しい文化教育を開創していた。しかし、厳格な階層制限が存在していたので、日本

人以外の民族が同じのように公学堂に入学することができなかった事実もわかった。

民族協和の理想郷、人類安住の王道楽土の実現を標榜した結果は、終戦に伴って砕け、王道楽土の建国理念は大きなアイロニーであったと言うほかない。王道楽土と民族協和は多様なスローガンを掲げて、ビジュアルメディアを利用して子供たちにまで浸透させようとしたが、実現には至らなかった。

4.4 『児童読物改善に関する内務省指示要綱』の影響

1938（昭和13）年に内務省が通達した「児童読物改善に関する内務省指示要綱」の本文には、

『振仮名ノ使用一但シ特殊ノモノ、固有名詞ハコノ限りニアラズ色刷ノ上ニ印刷スル場合ニ於テハ特ニ活字ノ大キサ、色彩ノ配合ヲ注意スルコト将来ノ人格ガ作ラレル最モ大切ナル時代ナルヲ似テ、敬神、忠孝、奉仕、正直、誠実、謙讓、勇氣、愛情等ノ日本精神ノ確立に資スルモノタルコト 支那の子供は如何なる遊びをするか、支那の子供は如何なるおやつを食べるか等支那ノ子供ノ生活ニ関スルモノ、支那ノ風物ニ関スルモノなど子供ノ関心ノ対象トナルベキモノを取上げ、子供ニ支那ニ関スル知識を与へ似テ日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スルヤウ取計ラウコト』

という記述がある。

佐藤（1993）はこれについて児童教育の視点から議論している。1938（昭和13）年7月に少年少女たちと幼年絵本関係の編集者等を内務省に招き、講談会が行われた。内務省はそこで子供の興味への追従、内容の講談趣味化、今後の善処を要望している。当時の漫画家は不満を述べ、面白くない漫画が出ているとの発言もあった。また教育的、華美なる消費面の偏重を避け、生産文化の活躍面を取り入れることを規定している。特に、支那子供の生活、風物等により、それに関する知識

を与えて日支提携を強調し、侮辱する言語を廃止することが求められている。このような統制は、国体と国策の本義に努めることを強調するためである。

1938年ころから、内務省図書館の検閲強化は積極的統制政策で打ち出され、検閲を標準とするように強化された。本研究の研究対象とする『キンダーブック第六輯第二編マンシウ』、『講談社の絵本満州見物』等は児童雑誌検閲簿（1938年11月-1939年3月）に記録されている。子供の実生活に即して指導する、困難に耐える精神を醸成するだけで無く、日満支の提携融合を特に強調するためであったとも言える。子供の実生活を基盤にして、そこから生じる興味関心に従って、それとのつながりにおいて日満支の提携融合を考える。これは編集者、画家と国策の間に生じた大きな矛盾である。

5. 結論

テキスト分析の結果から、言語の特徴、物語性、言葉背後の意義を理解し、結論を導いた。絵本は多様な側面から満州の風物、現地交通、資源、農畜産物の豊かさを表現しているが、ストーリーの連続性に欠ける。漫画は単一の主題をめぐって満州へ行く経路を明瞭に表示する。ポスターは五族協和、共存共栄など政治的目標の達成を目的としている。

時代が進むと、ビジュアルメディアは検閲の影響を受けながら、移民国策を宣伝するための手段として次第に強硬になっていった。青少年移民が開拓の補充と認められたからこそ、意図的に移民国策を宣伝した。絵本は、満州各地の子供風俗を集めて、読み手である子供たちに、満州に関係する偏った知識と満州での美しい生活の空想を与えて、やがて影響が出てくる移民政策の関与が、児童たちの生活経験の一部として純化され消化されることを意図していたと考えられる。戦時中、絵本の幼児教育機能が変わり、特殊なプロパガンダ

の機能が顕在化していたこともわかった。

『児童読物改善に関する内務省指示要綱』によれば、色彩が高い芸術的な表現が必要であるとされている。5色配色のイメージ・スケールを使った分析では、絵本に使われている色調はすべてウォーム、ハード、クールのイメージに集中している。飛行機、列車、市場など具体的な素材が用いられるので、臨場感、現実感が強いという特徴が見られる。エリアカラーを活用し、実際に存在していた風景、港など場面に即する配色を使う比率が高い。満州協和会の指導の下で、ポスターに暖色を単一に使用して、王道楽土と共存共栄を明瞭に宣伝したことも判明した。

ビジュアルの視点から分析すると、事実と誇張が共存する手法で、多様な満州体験と平和友好の「夢の国 満州」というイメージを成功的に創作したと言っても過言ではない。画家も国策指導方針を遵守し、満州の苦痛を味合わなかった制作者が描いたことで、都市と農村の格差が隠れ、偽りの高い生活水準と美しい都市環境を青少年に与え続けた。その結果、青少年が満州を支援する気運も高まっていたと推測できる。

6. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、駿河台大学大学院総合政策研究科メディア情報学専攻長 村越一哲教授からは計量テキスト分析使用法について重要な示唆をいただいた。徐の現地調査の実施および修士学業全般にわたり、家族には本研究ならびに経済的、心身的に支援していただいた。記して感謝の意を表します。

7. 参考文献

- 1) 大日本雄辯會講談社. 講談社の絵本 満洲見物. 第3巻, 第8号, 東京, 大日本雄辯會講談社, 1940. 80p.
- 2) 日本玩具研究会. キンダーブック マンシウ.

第六輯, 第二號, 大阪, フレーベル館, 1933. 16p.

- 3) 田河水泡. あなたも義勇軍になれます. 東京, 拓務省拓北局, 1940. 16p.
- 4) 西原和海. 彷徨月刊 漫画満州. 東京, 彷徨舎, 2009, p.38-40.
- 5) 満洲と日本人編集委員会編. 満洲と日本人, 季刊1. 大阪, 大湊書房, 1976, p.126-127.
- 6) 満洲と日本人編集委員会編. 満洲と日本人, 季刊2. 大阪, 大湊書房, 1976, p.114-154.
- 7) 満洲と日本人編集委員会編. 満洲と日本人, 季刊3. 大阪, 大湊書房, 1976, p.161-170.
- 8) 満洲と日本人編集委員会編. 満洲と日本人, 季刊4. 大阪, 大湊書房, 1976, p.28-122.
- 9) 満洲と日本人編集委員会編. 満洲と日本人, 季刊特別号. 大阪, 大湊書房, 1976, 232p.
- 10) 宮脇淳子. 日本人が知らない満洲国の真実. 東京, 株式会社扶桑社, 2018, p.254-256.
- 11) 長与善郎. 復刻版少年満洲読本. 東京, 徳間文庫カレッジ, 2015, p.102-266.
- 12) 小林重順. カラーリスト 日本カラーデザイン研究所, 東京, 講談社, 1997. 158p.
- 13) 貴志俊彦. 満洲国のビジュアル・メディア—ポスター・絵はがき・切手. 東京, 吉川弘文館, 2010, 235p.
- 14) 松井孝也. 日本植民地史2 満州. 東京, 毎日新聞社, 1978, 303p.
- 15) ハイブリット・シュネー. 金森誠也訳. 「満洲国」見聞記 リットン調査団同行記. 東京, 講談社学術文庫, 2015, p.154-156.
- 16) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析第2版. 内容分析の継承と発展を目指して. 東京, ナカニシヤ出版, 2020, 251p.
- 17) 山中恒. 戦時下の絵本と教育勅語. 子どもの未来社, 東京, 2017, 127p.
- 18) 山室信一. キメラ—満洲国の肖像. 東京, 中央公論新社, 2004, p.130-137.
- 19) 安富歩. 満洲暴走 隠された構造. 角川新書, 2015, p.131-140.

- 20) 大山正. 色彩心理学入門. 東京, 中公新書, 2008, 235p.
- 21) 日本色彩研究所. 色彩科学入門. 東京, 日本色研事業株式会社, 2006, 87p.
- 22) Clare Painter, J.R. Martin, Len Unsworth. USA. Equinox Publishing Ltd. 2013, 186p.
- 23) 白取道博. 「満蒙開拓青少年義勇軍」の政策的地位 (1941～1945年). 横浜国立大学教育紀要, vol.31, p.27-44. (1991).
- 24) 内木靖. “満蒙開拓青少年義勇軍--その生活の実態”. 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集, vol.11, p.79-108. (2010).
- 25) 木村功. “あまんきみこの戦争児童文学—戦争体験の表象とその問題—”. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, vol.142, p.1-11. (2009).
- 26) 柴田哲谷. 『少年義勇軍』と『満蒙開拓少年義勇軍』から見る児童文学作家山田健二. 愛知学泉大学・短期大学紀要, vol.49, p.57-64. (2014).
- 27) 白戸健一郎. “中国東北部における日本のメディア文化政策研究序説：満鉄弘報課の活動を中心に”. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, vol.9, p.123-137. (2010).
- 28) 玉真之助. “満州産業開発政策の転換と満州農業移民”. 農業経済研究, vol.72, No.4, p.157-164. (2001).
- 29) 是澤博昭. “日本学童使節のイベント化とその政治的利用：満州国と少女・少年”. 国立歴史民俗博物館研究報告, vol.206, p.129-162. (2017).
- 30) 是澤博昭. “満州事変と近代子供観の大衆化：『大阪朝日新聞』の報道を中心として”. 大妻女子大学家政系研究紀要. Vol.51, p.73-82. (2015).
- 31) Dornetti Filippo. “「満州国」協和会研究の成果と課題”. 三田学会雑誌, 三田学会雑誌, vol.105, No.4, p.693-717. (2013).
- 32) 平野健一郎. “満州国協和会の政治的展開-複数民族国家における政治的安定と国家動員”. 日本政治學會年報政治學, vol.23, No.0, p.231-283. (1972).
- 33) 早川知江. “絵本の絵を分析する：マルチモーダル・リテラシー教材開発のための枠組み紹介と検証”. 名古屋芸術大学研究紀要, 39, p.229-245 (2018)
- 34) 玉真之助. “満州産業開発政策の転換と満州農業移民”. 農業経済研究, vol.72, No.4, p.157-164. (2001).
- 35) 佐藤広美. “児童文化政策と教育科学—内務省「児童読物改善ニ関スル指示要綱」(1938年10月)をめぐって”. 人文学報, vol.240, No.28, p83-118. (1993).
- 36) 宮本大人. “戦争と「成長」児童読物統制下の子供向け物語漫画におけるキャラクター描写—” 明治大学国際日本学研究, vol.10, No.1, p29-53. (2018).
- 37) 森俊夫; 内田裕; 梶浦恭子. “絵本の色彩的特徴と色彩感情、言語的表現の関係”. 日本色彩学会誌, vol.35, P108-109. (2011).
- 38) 昭和十五年勅令第二百六十八号関東局ニ在満教務部ヲ設置スル等ノ件中ヲ改正ス. 国立公文書館. 公文類聚・第六十八編・昭和十九年・第三十一卷・官職三十一・官制三十一 (内閣. 行政文書. 1944)
- 39) 児童雑誌検閲簿. 国立公文書館. 行政文書. 内閣・総理府. 米国から返還された公文書〔返青・内務省等関係〕. 返青18003000 (内務省警保局図書課出版検閲係. 行政文書. 1938.11-1939.03)
- 40) 毎日新聞社. 日本植民地史2 満州. 東京, 毎日新聞社, 1978, 306p.
- 41) 松本栄一・香内三郎・水上勉他. 満洲昨日今日. 東京, 新潮社, 1985, 127p.
- 42) 南満鉄道. 南満洲鉄道沿線写真帖. 東京, 写真製版調所, 64p.
- 43) 南満鉄道. 全満洲名勝写真帖. 東京, 松村好文堂, 1937, 64p.

- 44) 陈实. 东北沦陷区童话研究. 哈尔滨, 北方文艺出版社, 2009, 411p
- 45) 马伟. 日本“北满移民”研究, 北京, 中国社会科学出版社, 2015, 257p.
- 46) 李淑娟等. 日本殖民统治与东北农民生活(1931-1945年). 北京, 社会科学文献出版社, 2014, 378p.
- 47) 高晓燕. 东北沦陷时期殖民地形态研究. 北京, 社会科学文献出版社, 2013, 383p.
- 48) 王希亮. 近代中国东北日本人早期活动研究. 北京, 社会科学文献出版社, 2017, 298p.
- 49) 顾伯冲. 日本开拓团移民侵华纪实. 北京, 商务印书馆, 2015. 149p.
- 50) リサーチ・ナビ. 国立国会図書館. last update 2021-3-18, (参照2021-10-18).
<https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-208.php>
- 51) 本・資料を探す. 国立国会図書館. 国際子ども図書館. (参照2021-10-18).
<<https://www.kodomo.go.jp/search/collection/other03.html>>
- 52) 満洲国ポスターデータベース. Manchukuo Propaganda Posters & Bills. 京都大学. (参照2021-10-18).
<https://app.cseas.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000021MAN>
- 53) 東南アジア地域研究研究所. last update 2011-3-1. (参照2021-10-22).
<http://app.cseas.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe>
- 54) Flag of Manchukuo. last update 2022-2-6. (参照2022-7-23).
<<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?search=Manchuria+flag&title=Special:MediaSearch&go=Go&type=image>>

Visual Media for Youth and Immigration Policy in Manchuria

XU Danyi, NOMURA Masahiro

[Summary]

Japanese imperialism placed great emphasis on the Manchurian immigration project and considered young men and boys to be the most promising pioneer immigrants from the beginning. Involved in the pioneering agricultural immigration policy, facts related to the Manchurian frontier and policies such as the recruitment and sending of youth volunteer corps have been revealed. Research on publicity and propaganda in Manchuria has focused on broadcasting, radio, and newspapers, but there were also a variety of visual media such as magazines, illustrated books, cartoons, and posters, which were deeply involved in every corner of the lives of the common people of the time. The importance of color in visual media cannot be denied, since color is deeply related to human emotions and perceptions, and plays an important role in identifying and communicating with people.

In order to obtain accurate results, we introduced a research method called color scale application. Using the results, we examine the visual media for youth and boys in Manchuria and its immigration policy. Textual analysis was conducted on the content of the articles described in them, both qualitative and quantitative.

The visual media, it turns out, became increasingly hard-line as a means to promote the national immigration policy, while being subject to censorship. It was also found that they clearly promoted the royal paradise and coexistence and co-prosperity. As a result, it can be assumed that the youth were also more inclined to support Manchuria.

[Key words]

Manchuria, immigration policy, visual media, metric text analysis, color analysis, illustrated book, poster, cartoon